中部のエネルギーを築いた人々

21世紀の中部圏を展望した田中精一

その2－中経連会長で学術研究・スポーツ・文化の振興に貢献する

田中精一
1911（明治44）～1998（平成10）
（社長就任あいさつ－昭和52年）

田中精一は1982（昭和57）年、中部経済連合会会長に就任、1991（平成３）年までの10年間、会長を勤めた。当初の昭和57年から昭和60までの３年間は中経連会長と中電社長を兼務し多忙を極めた。

昭和57年に中経連の「21世紀の中部ビジョン」が策定された。その基本方針は「名古屋を中心とする中部経済圏は、わが国基幹産業といえる輸送用機器等の機械製造業を始めとする多様な製造業が集積しており、我が国経済のけん引役としての役割を果たしてきた。今後とも各地の産業・研究開発機能の集積を生かすとともに経済、学術、研究、文化、スポーツ、観光などの多様な分野での連携・交流を積極的に展開し、世界に広く開かれ、暮らしやすく魅力ある創造圏域を目指すことが求められている。」と要約されており、田中会長は、これら計画の具体策を次々にまとめ実現していった。

また、1980（昭和55）年代頃から企業が文化、芸術活動を支援するメセナ活動が提唱され、日本経済団体連合会などが広く教育や環境、福祉などの企業の行う社会貢献活動を推進した。これらの一環として企業と消費者との信頼関係を築く企業博物館が設立されてきた。

企業博物館は、現在、多種多様な博物館が存在するが、ただ単に商品を陳列し、企業ＰＲするのではなく、新たな視点から市民とのコミュニケーションを図る社会教育施設としての役割を持ち、地域社会に活力を与える企業博物館が多くなった。

今月号は、中電会長として電気文化会館を建設し、中部地方で初めての企業博物館であるでんきの科学館のオープン、中経連会長としてファインセラミックスセンターの設立、名古屋フィルハーモニー交響楽団の設立、徳川美術館の増改築などを紹介する。

発電所所在地に電気文化会館を建設し、でんきの科学館をオープンするまで

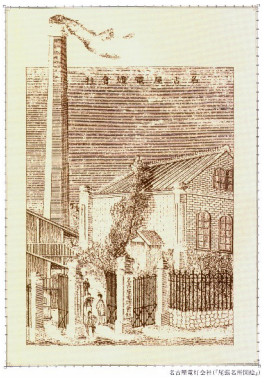
（1）中部地方電気事業発祥の地―名古屋電燈の発電所

市政施行で名古屋市になった1889（明治22）年12月、名古屋電燈会社が現在電気文化会館のある所在地に、25ｋＷのエジソン式直流発電機４台・総出力100ｋＷを建設し、中部地方で初めて電気を送った。

名古屋電燈を設立した丹羽精五郎と主任技師で甥の丹羽正道は、アメリカにわたり発明王トーマス・エジソンから直接教えを受け事業を始めた。

当時の模様は、尾張名所図絵に「名古屋電

燈会社は南長島町にあり、レンガの構造優麗にして煙突雲をしのぎ市内各町に架設する電線は、あたかも蜘網のごとく路頭にむらがり、工場には精巧の器械を装置し、煙筒ひとたび煙を吐けばたちまち運転を始め、電気次に線に通じて市街需要の各戸に点灯す、その灯光の鮮明にし光力の堅強なるは暗夜もまたなお白昼の思いあらしむ。その美観実に言うべくもあらざるなり（一部現代仮名で修正）」と記されている。



名古屋電燈の発電所
（尾張名所図会）

名古屋電燈の本社建屋

（2）名古屋電燈の本社建物

1911（明治44）年、発電所跡地に本社建物（名古屋市中区南長島町、青柳町、南桑名町にわたる780坪）を竣工させた。この本社建物を設計したのは初代名古屋高等工業学校建築科の初代鈴木禎次教授である。鈴木教授は夏目漱石の義弟に当たり、明治29年東京帝国大学を卒業、文部省海外留学生として英仏で学び、帰国後、教授となり大正10年に退官する15年間建築学を教えた。この間、鶴舞公園の噴水搭や、いとう呉服店など数多くの設計に携わったことで知られる。

東邦電力の電気百貨店

電気百貨店
【加藤金一郎画伯】

（3）東邦電力㈱の名古屋支店、電気百貨店から中部電力の広小路サービス・ステーション

大正11年東邦電力㈱が発足し、本社を東京丸の内にある東京海上ビルに移転した。このため、東邦電力名古屋支店として使用された。その後、名古屋支店建屋が松ヶ枝町に移転したので、昭和４年、電気普及館に改装され、昭和７年に電気百貨店に改称された。

電気百貨店は家庭用、業務用、工業用農業電化など電気の新規需要を促進するもので、現在の電化モデルルームとしての役割を担っていた。名古屋在住の加藤金一郎画伯が電気百貨店を描くなど市民からも広く親しまれたが、昭和20年３月17日の空襲により焼失した。

戦後の一時期、空白状態が続いたが、昭和36年から昭和43年の７年間、中部電力広小路サービス・ステーションとして、家庭電化ブームを起こした三種の神器（洗濯機、冷蔵庫、白黒テレビ）などの家庭電気機器の展示や電気に関する御用承りなどサービスの拠点として利用された。

（4）電気文化会館を建設し、でんきの科学館をオープン

1986（昭和61）年７月20日に、地域社会の文化形成と企業の文化活動に資する電気文化

中部電力の電気文化会館と
記念プレート

会館が建設され、でんきの科学館がオープンした。また、地下２階にあるザ・コンサートホールは名古屋フィルハーモニー交響楽団の演奏会、中村紘子さんのピアノ・コンサートのこけら落しから始まった。

　でんきの科学館は、中部地方で初の企業博物館相当施設の科学館として開館した。エネルギーを得るために、いろいろな方法で挑戦してきた内容や、電気エネルギーを通して「人と科学のふれあい」をテーマに、“見て、ふれて、体験参加して”電気の不思議な世界を、多くの教材を使った実験装置で科学の面白さを学習する社会教育の役割を担ってきた。

　このように次代層を中心にした学習支援活動などを積極的に取り組んできた結果、30周年を直前にした平成28年４月24日に来館者1,500万人を達成した。

　なお、でんきの科学館までの歩みは次の通りである。

でんきの科学館までの歩み

西暦	和暦	発電所名
1889	明治22	名古屋電燈会社が南長島町発電所を建設、名古屋の一般家庭に初めて点灯
1908	明治43	長良川水力発電所完成、第10回関西府県連合会会場（鶴舞公園）に送電
1911	明治44	名古屋電燈㈱本社建屋竣工
1916	大正５	名古屋電燈から分離し㈱電気製鋼所を設立、現在の大同特殊鋼に至る
1922	大正11	東邦電力㈱発足
1929	昭和４	広小路に電気普及館開設
1932	昭和７	電気百貨店に改称
1945	昭和20	名古屋空襲により焼失
1951	昭和26	中部電力㈱発足
1956	昭和36	広小路サービス・ステーションとして営業
1970	昭和45	日本万国博覧会（大阪万博）開催
1985	昭和60	国際科学技術博覧会（つくば科学万博）開催
1986	昭和61	電気文化会館竣工、でんきの科学館オープン
2005	平成17	2005日本国際博覧会（愛知万博）開催
2016	平成28	でんきの科学館入館者1,500万人を達成

財団法人ファインセラミックスセンター（通称：JFCC）の設立

一般財団法人ファインセラミックスセンターは、1985（昭和60）年に財団法人の設立認可を受け、会長に東芝相談役の岩田弐夫（かずお）、副会長に田中精一が就任した。

同センターはファインセラミックスに関する研究、試験、開発を行うわが国唯一の公益法人で、現在、材料技術研究所とナノ構造研究所があり５つの事業に取り組んでいる。

財団法人名古屋フィルハーモニー交響楽団の設立

1966（昭和41）年７月に楽団が結成され、翌年10月に第１回定期演奏会を開催した。

今年で50周年を迎える。初代理事長は三宅重光（当時：名古屋商工会議所会頭）、田中精一が副理事長、昭和61年に理事長に就任した。1973（昭和48）年４月名古屋市の出捐により財団法人となった。

初代音楽総監督に岩城宏之が就任し、その後、日本を代表する巨匠指揮者を迎え、演奏の質の向上やレパートリーの拡充に取り組み全国から高い注目と期待が集まっている。

徳川美術館増改築建設協議会の顧問に就任

徳川美術館は尾張徳川家第19代当主徳川義親が1931（昭和６）年に財団法人尾張徳川黎明会を設立した。その後、徳川黎明会と改称し昭和10年に尾張徳川家名古屋別邸の現在地に日本の私立美術館の草分けとして開館した。

収蔵品は、世界的にも有名な国宝「源氏物語絵巻」をはじめ国宝９件、重要文化財59件、重要美術品46件を含んだ総数およそ１万件に達する。さらに尾張徳川家の記録や文書類を収める研究機関・徳川林政支援急所を持った美術館である。なお、この美術館の本館と南収蔵庫は帝冠様式で国の有形登録文化財に指定されている。

開館50周年を記念して、名古屋の文化シンボルとして美術館の増改築が計画され、地元愛知県、名古屋市、経済界、広く全国に協力を呼びかけ、田中精一は新徳川美術館建設協議会建設顧問に就任した。そして1987（昭和62）年に、現在の本館と登録文化財の旧本館と南収蔵庫が一体化されて改築、新旧文化財保存方法の一つの在り方を示した。

このほか地元のスポーツ振興のため、1991（平成３）年に㈱名古屋グランパスエイト取締役会長、1997（平成９）年に㈱名古屋ドーム取締役会長に就任した。1998（平成10）年に死去し、中部電力とＪＲ東海の合同社葬が名古屋ドームで執り行われた。

（寺澤　安正）